

学力向上先進地域視察研修 in 岐阜県岐阜市

グループ別テーマ「学力の基盤づくりとなる取組」

取組の実際

○ 集団づくり(学級経営)

「学級経営が学力向上の基盤である」という認識を持って教育活動を行っている。学級目標が学級の行動指針として機能している。学校全体としても「あいさつ、そうじ、整理整頓」(小)、「挨拶、掃除、合唱」(中)のように具体的な言葉で目指すべき姿が具体化され、共通理解されている。小中9年間を通した学習規律の徹底は、集団づくりの基盤を成し、仲間と学びあう授業を支え、学力向上につながっている。

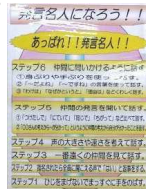


○ 学習規律

学習規律においては、小中一貫して9年間同じスタイルで指導を行っている。

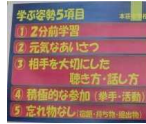
【基本方針の徹底】(小学校)

学習規律の確立は「授業の基本」という考えから、学習指導部が3ヶ月ごとに児童の実態を基に、育てたい力を焦点化した基本方針を出し、職員や児童の学習規律に対する共通理解を図っている。



【学級の授業評価「5」をめざす取組】(中学校)

教科の係長が学級委員と同等の責任を与えられ、係長が授業前2分の学習を進めたり、今日の学習のねらいや注意を示すことで、生徒自身も授業への構えをつくっている(自治活動による主体的な活動)。



今後の取組

【生徒指導担当主幹教諭として】

- 「凡事徹底」=「当たり前」のことに「当たり前」に行うことを教師間で共通理解し、徹底していく。さらに「何を当たり前に行うのか」ということを具体的に示し、節目ごとに全校集会等で評価する場を設定することで、日々の実践を振り返り、共通の目標に向かうチーム力を高める。
- 学級・学年での取り組みにおいて、個人や学年の実践に任せるのではなく、学校全体で共通実践事項を設定することで、共通目標に向けた学級の取組の差を小さくし、生徒指導や教科指導における指導レベルを整える。

【学級担任・学年主任として】

- 学級担任・学年主任が育てたい力を明確にした上で、児童生徒の実態を見取り、課題を明らかにして、それらをどのようにして育てていくのかという基本方針を全職員で共有していき、児童生徒の実態に即した指導や授業を展開する。

共通テーマ「授業づくりについて」

取組の実際

○ 全ての指導の土台にある小中共通で行う「3つの見届け」

児童生徒の「できた」「わかった」を大切に、学習状況を把握するために、毎時間、小中共同して「3つの見届け」という視点を導入している(単元の進度に合わせて3つの見届けを焦点化し、本時で目指す姿に確実に近づけている)。この「3つの見届け」を基にして、毎時間、課題解決型の授業づくりを行っている。

- ① 実態の見届け…授業前の子どもの実態を見極め、授業での課題化につなげる。
- ② 学習状況の見届け…授業中の一人ひとりの様子を把握し、その子に必要な指導・支援につなげる。
- ③ 定着状況の見届け…授業終末にまとめ・ふりかえる場をきちんと設け、終末の指導につなげる。

○ タブレットを活用した授業

指導案に明記した「3つの見届け」から見取った児童生徒の実態や課題への対応、学習内容の定着度等を確認するために、タブレットの活用を位置付けた授業を展開している。また、学力低位の児童生徒に対する「読む」「書く」「計算する」の反復練習のための支援としても有効に機能している。さらに、授業者が、事前に十分な教材研究を行い、活用させたい場面を計画しているため、児童生徒が自分の課題に対して意欲的に学習に取り組むことができている。



今後の取組

【教務担当主幹教諭として】

- タブレットを活用した授業が、いかに学力低位の児童に対して有効であるかを、校内研修等で啓発していく。
 - 年間カリキュラムにおいて、タブレット活用の授業を位置付ける。授業中におけるタブレットの活用については、学習内容の習熟において有効活用ができるように、単元や授業の中での活用場面を十分に吟味を行い計画する。
- #### 【校内研修担当者として】
- 学習の定着状況の実態と児童生徒を見取る具体的な視点をもつために、全国学力・学習状況調査等をもとに「身に付けさせたい力」や「各教科で育てたい見方・考え方」を校内で整理し、共通理解を図るための場を設ける。
 - 授業の中で生徒を見取る視点や方法を研修し、全学年・全教科でその日常化を図る。

まとめ

- 義務教育9年間を見通した、中学校区で一貫した学習規律のスタイルを定着させるためには、小中の教師が相互に連携し、児童・生徒の育成したい力を共有することが大切である。
- 教師間の指導格差をなくし、児童生徒が落ち着いた学校生活を送るためには、学校方針を全職員が共通理解し、同じ価値観、同じ手法で生徒指導や教科指導を行うことが大切である。
- 「できる喜びや感動を味わわせる」授業づくりのためには、岐阜市内統一の取組である「3つの見届け」を参考にし、「問題解決型の授業」を展開していくことが大切である。

学力向上先進地域視察研修 in 岐阜県岐阜市

グループ別テーマ「活用する力を重視した授業改善」

取組の実際

○ 「問題解決型学習」を取り入れた授業

岐阜市内の小・中学校における授業の中心は、「問題解決型学習」である。この学習で大切なことは、まず児童生徒が追求したくなる課題を設定すること。次に個やペアで考えさせ自分の考えを作らせること。そしてお互いの考えを発表し合い、まとめていくことである。これによって、考える力や説明する力が身についてくる。

○ 予習・復習の徹底

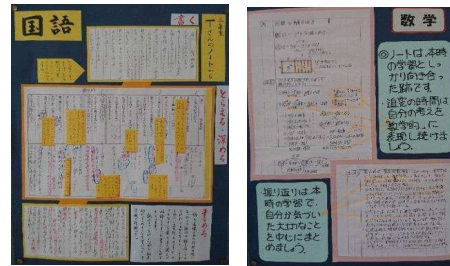
教師は必ず予習・復習ノートを点検・確認している。その結果、質問紙調査において家で予習・復習をしていると答えた生徒は右の表の通りである。

	家で学校の予習・復習をしている		
	視察校	福岡県	全国
H29予習	70.3	27.6	31.7
H29復習	68.1	47.6	50.5

予習・復習の取組が積み重ねられていることで、基礎・基本を活用する場面において、児童生徒が主体的に学習活動に臨むことができている。

○ 掲示物の工夫

教室や廊下の目につきやすい場所に、各教科ごとに見本となる生徒のノートを例示している。【写真1】生徒の思考の過程が見て取れ、教師からのアドバイスが書かれているので、他の生徒も参考にすることができる。



【写真1】

今後の取組

【教務担当主幹教諭として】

問題解決型学習を取り入れたカリキュラムの作成

活用する力を身につけさせるために、全教科で各単元の中に問題解決型学習を位置づけた年間指導計画を作成する。

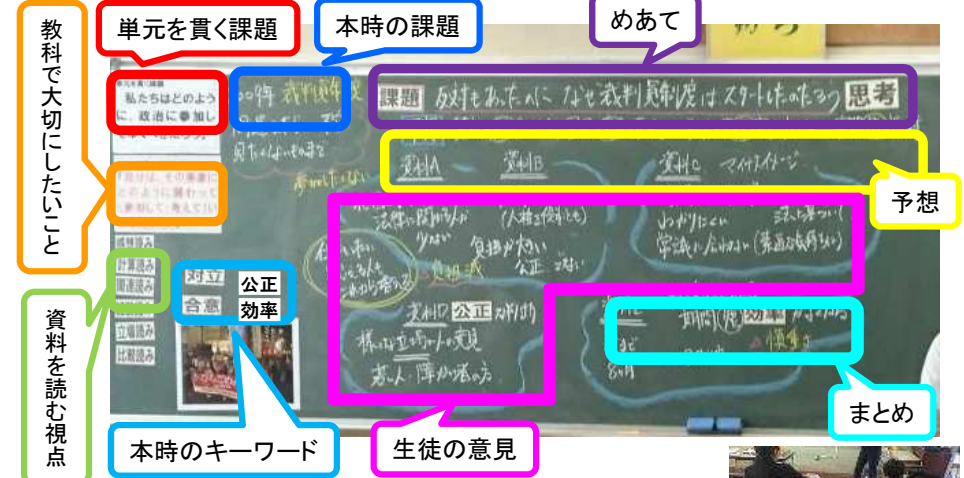
毎日出す学習課題(家庭学習等)の提案

「基礎・基本の確実な定着」と「活用する力の育成」を目指し、単元計画に沿って予習・復習の課題を出し、点検する。また、模範となるノートのサンプルを掲示して、勉強の仕方の参考にさせる。

共通テーマ「授業づくりについて」

取組の実際

○ 板書の構造化(例:中学校社会科)



○ 交流活動の工夫

目的に応じて交流する人数と時間を使い分けている。

- (例) ・ 自分の考えを確かめたり、問題解決のヒントを得るために、ペアで1分間相談する。【写真2】
- ・ お互いの意見を比較し付加・修正するために、小集団で5分間意見を交流する。【写真3】
- ・ より考えを深めたり、まとめたりするために、小集団で10分間話し合う。



【写真2】



【写真3】

今後の取組

【校内研修担当として】

全教科で行う共通取組の提示

「追求したくなる課題提示」「構造化された板書計画」「交流活動の工夫」「ICTの活用方法」等、共通して取り組む内容を研究推進計画に示す。

まとめ

- 学力を向上させるためには、全職員が、児童生徒に身に付けさせたい資質・能力や取り組む内容を共通理解し、同じベクトルで取り組むことが大切である。
- 校内研・授業研を通して評価・改善していき、質を高めていく必要がある。
- 「当たり前なことを当たり前にする」というスタンスのもと、「児童生徒の声が聞こえる授業(教師が説明ばかりしない授業)」を行うことが学力を向上させる上で大切である。

学力向上先進地域視察研修 in 岐阜県岐阜市

グループ別テーマ「教員の意識・指導力の向上」

取組の実際

○ 授業レベルの指導力の保障と向上

・単位時間のスタンダードの確立

学習活動、児童生徒支援や配慮事項を記載し、「つかむ」「さぐる」「ふかめる」で構成された『授業の流れの基本』を4月に全職員で共通確認している。主な学習活動、指導支援や配慮事項が示されており、誰もが基本的な流れで授業が行えるようにしている。一定の授業レベルを保つ上で、有効な方法であり、ベテラン教師と若手教師の授業技術の交流にもつながっている。

○ 組織の機能化

・PDCAサイクルの日常化

学力向上、学級経営等におけるPDCAサイクルの期間を短く設定することで、取組に対する修正点等について判断しやすい状況をつくっている。また、それが機能しているという背景には、教員同士の関わりや研修が充実し学級経営全般についての情報交換や指導・支援が行われていることにある。

・凡事徹底

日々の取組等に対し、教師がどれだけこだわって児童生徒に指導していくかが大切である。職員会議や打合わせ、必要に応じて主任会を開き、共通理解を図っている。

・小・中学校間の人事交流

小・中学校間での人事異動を市(県)の施策として行っていることで、お互いの様子や環境の違い、課題等の理解が深まり、校種に応じた授業改善が実現している。

共通テーマ「授業づくりについて」

取組の実際

○ コンパスカリキュラムで指導計画作成のサポートと高い水準の授業づくり

単位時間のスタンダードの確立を図るため、「岐阜市コンパスカリキュラム」という各教科における年間指導計画を全小中学校に配布し、日々の授業改善を行っている。このコンパスカリキュラムには、問題解決型の授業モデル、単元ごとの評価表、ICTの活用、主体的・対話的で深い学びの視点からの指導・援助等が示されており、どの教員が指導に当たっても、指導の質を一定に担保することができている。

○ 「主体的、対話的で深い学び」のための工夫

・課題解決学習の徹底

いずれの教科、学年、校種においても、その一単位時間が課題解決学習になるよう、導入段階で明確にその課題が示されている。

・児童生徒の声が届く授業づくり

対話的な学びの実現に向け、一単位時間に必ず子供が説明する場面を位置付けている。このことが、主体的な学びや深い学びにもつながっている。



○ 学び合う集団づくり

・「合い言葉」「チームごとの目標」

授業で目指す児童生徒像を明確にするために、小学校で「合い言葉」、中学校では「チームの目標」と、2～3ヶ月毎に目標を徐々に高いものに設定している。

・学び合う風土

しっかりとした生徒指導の基盤の下、分からないことは恥ずかしいことではなく価値あることであるといった指導が徹底されていることで、互いに意見を伝え合うことに抵抗なく、自由に発言し学び合う風土が醸成されている。このことが、多くの挙手や交流活動の際に自分の意見を伝える姿につながっている。

今後の取組

【教務担当主幹教諭として】

- ・ 共通理解、共通行動すべき事項を職員室に『見える化』して示す。取組期間後には、成果を掲示し、意欲の向上につなげていく。

【校内研修担当者として】

- ・ 校内研修で実践された授業の指導案を毎年データ化して蓄積し、全員で共通して使えるようにしていく。
- ・ 研修のための研修でなく、目的を明確にして、全教員で共通理解を図った上で進めていく。
- ・ 自校の課題を管理職と共に共有し、それが研修に反映されるようにする。
- ・ 授業スタンダードに基づいた授業が行えているかを毎月確認することで、PDCAサイクルを機能させるとともに、それを学校全体で数値化し共通理解することで授業に対する意識の向上につなげる。

【学力向上コーディネーターとして】

- ・ 教科担当者の実態や課題を分析し、学年間の授業方法・内容を確認・系統化が図られるように研修を仕組み、統一した取り組みを行う。

今後の取組

【教務担当主幹教諭として】

- ・ 校内環境でも仲間づくりの『見える化』を行い、児童生徒の意識を高めていく。

【校内研修担当者として】

- ・ 授業づくりの基盤は集団づくりにあることを教師間で十分に共通理解を図ったうえで、生徒指導を兼ねた授業の目標づくりを設定する。
- ・ 主題研修のテーマだけでなく、他教科を含めた学び合う集団づくりのための手立てを提案していく。
- ・ 一単位時間全体ではなく、段階をしぼった研修の柱とする。

【学力向上コーディネーターとして】

- ・ 学力向上に関わる情報や資料を、本校の実態との関連を明らかにして提供することで、学力向上への意欲・関心を高めていく。

【学級担任として】

- ・ 導入段階で児童・生徒に課題意識をもたせ、それが学習意欲へとつながるように意識していく。

まとめ

- 学力向上を実現させるためには、まず、個々の教員の指導力の向上を図ることが必要不可欠である。
- 若年層が増える今、個人任せにするのではなく、学校全体として、組織的に取組を進めていくことで質の向上を図る必要がある。

学力向上先進地域視察研修 in 岐阜県岐阜市

グループ別テーマ「学校全体の組織力、家庭・地域との連携」

取組の実際

○ 学校の組織づくり

小学校では、生徒指導主事が問題行動、特別支援教育コーディネーターが個別の教育支援教育、相談主任が教育相談や不登校児童対応というように生徒指導の窓口を一本化し、可能な限り、担任以外が対応している。これによって、担任は日常の授業に専念できるようにしている。

また、学校経営方針の具現化のために、一年を通して段階的(5期「たねま期」「みずま期」「いきい期」「きらめ期」「つばや期」)に児童を育成するという方針を打ち出すとともに、各主任・主事が教育活動における指導の重点と方策を講じ、共有化を徹底している。

○ 小中一貫教育推進

中1ギャップを解消し、9年間を見通した系統的な教育を目指し、中学校区単位で次のような取組が行われている。

- ・小中合同の学校運営協議会
- ・教育目標の統一
- ・学び方や学びの系統表
- ・小中兼務の英語教諭の加配
- ・小中リーダー会
- ・合同あいさつ運動 等

○ コミュニティ・スクールの運営

岐阜市では、市立の幼・小・中・高・特別支援学校のすべての学校において、学校運営協議会を中心としたコミュニティスクールが導入されている。この仕組みを利用して、学校の抱える課題を保護者や地域の方と共有したり、保護者や地域の意見を取り入れたりすることで、「あいさつ運動」「よいことみつけの運動」など、各学校の課題や特色に応じた活動を協働で展開したり、長期休業日や放課後、休日を利用した児童生徒の地域での居場所づくりを行ったりしている。

今後の取組

【教務担当主幹教諭として】

◇学校の組織づくりのため

学校目標を段階的・具体的に実行するために、校務運営の核となる部会の主任に働きかけ、各部が具体的な方策を立てる。

学校全体で子供を見る！

◇小中一貫教育推進のため

9年間をめざす児童生徒の姿(指導目標)を共有化するために、校内研究主任と連携しながら、小中間での授業交流を計画・実行する。

小中学校で子供を見る！

◇コミュニティスクール運営のため

地域と連携して児童生徒を育てていくために、学校と地域とが考えた取組を実施する際に具体的な活動内容を、地域や学校の職員、児童・生徒に示していく。

地域とともに子供を見る！

まとめ

- 組織的な学校運営の下、9年間を見通した指導計画の作成、学校・家庭・地域が一体となった児童生徒の育成が大切である。
- 自らの学びを自己の課題として明確に捉えさせ、その課題に対して自分の考えや友達の考えを共有し、お互いの考えを評価していく授業づくりが大切である。

共通テーマ「授業づくりについて」

取組の実際

○ ユニバーサルデザインの授業づくり～問題を課題化へ～

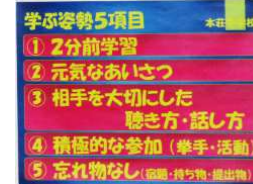
教師が提示した問題から児童生徒の課題となるように、児童生徒と対話をくり返しながら、「考えるべきこと」を明確に焦点化させた授業づくりが行われている。児童生徒から湧き上がった問いは、追究意欲を喚起し、効果的な課題解決学習につながっており、その学習過程は、資料1に示す通り。



【資料1 学習過程】

○ 3つの見届けと授業評価を取り入れた授業づくり

児童生徒による「評価」の充実が図られており、特に、小学校では、①「児童の実態」、②「児童の学習状況」、③「児童の定着状況」の3つの視点で見届けを行っている。その授業評価が、中学校での「毎時間の授業評価」へとつながっている。具体的には、満点を5点とした授業者による評価を毎時間行い、1週間サイクルで、授業評価「オール5」を目指す取組を行っている。(資料2)

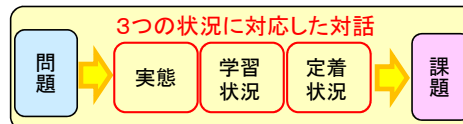


【資料2 授業評価の視点】

今後の取組

【校内研修担当者として】

～対話をもとにした問題を課題化へ～



「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、児童生徒の「実態」・「学習状況」・「定着状況」に対応した対話を通して、問題の課題化を促進し、自力解決や他者との交流等の様子を評価していくというサイクルを授業改善の中核となる方途の1つとして構築し、日常化を図っていく。

【コア・ティーチャーとして】

くめあて	月 日(月)	月 日(火)	月 日(水)	月 日(木)	月 日(金)
1	算数 4時	理科 5時	国語 5時	体育 5時	音楽 5時
2	体育 5時	理科 5時	国語 5時	社会 5時	音楽 5時
3	社会 5時	国語 5時	理科 5時	音楽 5時	体育 5時
4	社会 5時	国語 5時	理科 5時	音楽 5時	体育 5時
5	国語 5時	理科 5時	音楽 5時	体育 5時	社会 5時
6					
平均	4.9	5.0	5.0	5.0	5.0

教科の単元末だけの評価ではなく、1単位時間ごとに、見方・考え方を働かせた姿、授業に対する姿勢、表現したことやものなどのパフォーマンス評価の視点を明らかにし、「毎時間の授業評価」の在り方を児童生徒に伝えていく。

学力向上先進地域視察研修 in 岐阜県岐阜市

グループ別テーマ「教育行政としての取組」

取組の実際

岐阜市教育委員会の施策

5年先行く教育 教育立市ぎふ 3つの場面・局面での支援を！
チャレンジ(難しい場面に立ち向かう)、サポート(悩んだ時に支えを必要とする)、コモン(全ての人が等しく享受する)

○ 学校・地域間の格差是正

- ・少人数加配、支援員(ハートフルサポーター)を配置した少人数指導の充実
- ・全教科、全単元(題材)の略案集「コンパス・カリキュラム」(右図参照:1単位時間ごとの展開例、具体的な発問、ICTの効果的な活用、評価規準等を含む)を作成
- ・児童生徒の家庭学習をサポートするためのHPの活用・充実

○ 小中一貫した教育

- ・小中一括採用による人事交流
- ・小中一貫した英語カリキュラムの策定の取組

○ 教育施策の評価

- ・1月下旬に、岐阜市教育講評会・評価のための学校訪問
→検証改善サイクルをまわすことにつながっている



【少人数指導の様子】



【コンパス・カリキュラム】



【ICTの効果的な活用】

今後の取組

【教育事務所及び教育センター指導主事として】

- ◆各教育事務所主催研修や学校訪問及びサークル活動等において、次の点を発信する。
 - ・全教職員が同じ方向を向いて組織的に取り組むことの重要性
 - ・岐阜市のコンパス・カリキュラムの活用例や小中一貫教育の取組
- ◆学校の裁量を認める前提となる、学校経営、校務運営、教務運営への支援をする。
(フォローアップ訪問、支援訪問等、相談しやすい関係の構築＝パートナーシップ)
- ◆重点課題研究指定事業等における「小中が連携したカリキュラム・マネジメント」の研究に対して指導支援する。
- ◆小中で共通して実践できる授業スタイルを浸透・徹底させる等、コア・ティーチャーが活躍する機会を設定する。
- ◆学力向上推進拠点校事業の取組を管内小中学校に浸透させる取組を推進する。

まとめ

「義務教育9年間を通して児童生徒を育てる」という考えの下、ふさわしいと考えられる指導法(例えば、問題解決型授業、聞き方・話し方の指導、生徒指導等)をシンプルにスタンダード化するなど、小中学校で授業スタイルを共通理解・実践していくことが大切である。学びをつなぐという視点からも、各教科の学び方だけでなく、話し合い活動の仕方や家庭学習の仕方なども含めて、中学校区ごとに連携を進めていく必要がある。校長のリーダーシップの下、教頭や主幹教諭、校内研修担当者等の組織としての体制づくり(誰が・何を・いつするのか)を確立し、全職員に浸透・徹底した取組ができるよう管内の支援を進めていきたい。

共通テーマ「授業づくりについて」

取組の実際

○ **単元構成**…単元のはじめにゴールを設定する等、「学びの連続」を大切に単元づくり

○ **導入段階における問題意識(課題意識)を喚起させる手立ての工夫**

- ・前時との関連、日常生活との関連を強く意識させる教材の提示
- ・児童生徒にとって、必然性のある課題の設定
- ・全授業で「課題意識」を高める活動の工夫

○ **「主体的・対話的で深い学び」を実現させる工夫**

- ・「岐阜市の授業は問題解決学習である」という自覚をもった教師集団が学び合いや練り合いの場がある授業の構築
- ・発言形式「○○です。どうですか。」→「わかりました」「同じです」からの脱却
- ・全小中学校に、50型デジタルテレビ、電子黒板、デジタル教科書、タブレットPC等を導入…ICT機器を活用した学習の充実
- ・児童生徒が自発的に考え、議論し、発信する場として、全小中学校に、可動式テーブルやホワイトボード等を備えたスペース「アゴラ」を整備

○ **終末段階における「まとめ」と「振り返り」の工夫**

- ・「まとめ」の後に、評価規準に応じた「活用問題」での確かめを設定
- ・どのような学びをしたか、何が伸びたか等を中心とした「振り返り」の位置づけ

○ **中学校生徒による授業評価(めざせオール5)の取組**

- ・各学級の係活動に教科長を位置づけ、学び方の充実を目指す。
- ・教科長を中心として授業前2分学習や授業総括(5段階評価)する。



【考えを練り合う様子】



【タブレット活用の様子】



【授業総括の様子】

今後の取組

【各教育事務所及び教育センター指導主事として】

- ◆基本研修や校内研修等において指導・助言する際、次の点を積極的に取り入れる。
 - ・学習する目的や意欲をもたせるために、単元の導入段階において、単元全体の課題を設定し、ゴールを明らかにすること
 - ・児童生徒の「学びの連続」を実現するために、一単位時間のめあてを設定する際は単元のめあてとのつながりや、前時と次時とのつながりを考慮すること
 - ・深い学びを実現するために、学び合いを位置付けた学習過程を構築すること
 - ・児童生徒も教師も、何がわかり、何ができるようになったのかを評価するために、終末段階に「まとめ」と「振り返り」を行うこと
 - ・小中連携の取組の有効性及び連携の在り方について情報を提供すること